

市民社会組織との協働によるシティズンシップ教育の実践

—桶川市立加納中学校の選択教科「社会」の事例—

Practice of the Citizenship Education by Collaboration with
the Civil Society Organizations: A Case of the elective subject
“Social Studies” in Okegawa Kanou Junior Highschool

大友 秀明 (埼玉大学教育学部社会科教育講座)

Hideki OTOMO

桐谷 正信 (埼玉大学教育学部社会科教育講座)

Masanobu KIRITANI

西尾 真治 (埼玉ローカル・マニフェスト推進ネットワーク)

Shinji NISIO

宮澤 好春 (桶川市立加納中学校)

Yoshiharu MIYAZAWA

埼玉ローカル・マニフェスト/シティズンシップ教育研究会

SAITAMA, LM/CE Association

埼玉大学教育学部附属教育実践総合センター

第6号 2007年 115～138頁 [別刷]

市民社会組織との協働によるシティズンシップ教育の実践

—桶川市立加納中学校の選択教科「社会」の事例—

Practice of the Citizenship Education by Collaboration with
the Civil Society Organizations: A Case of the elective subject
“Social Studies” in Okegawa Kanou Junior Highschool

大友 秀明* 桐谷 正信* 西尾 真治** 宮澤 好春***
Hideki OTOMO Masanobu KIRITANI Shinji NISIO Yosiharu MIYAZAWA

埼玉ローカル・マニフェスト/シティズンシップ教育研究会
SAITAMA, LM/CE Association

(目次)

- I 協働の経緯
- II 協働のねらいと意義
- III シティズンシップ教育の展開—桶川駅東口・商店街の活性化を目指して
- IV 協働の場面
 - 1. フィールドワーク「まち探検」
 - 2. マニフェストのワークショップ
 - 3. マニフェスト型提案資料の作成
 - 4. 「桶川市のまちづくり」案のプレゼンテーション
- V 協働の成果と展望

I 協働の経緯

本稿は市民社会組織(Civil Society Organization)との協働によるシティズンシップ教育の実践について、「協働」を中心に、その試みの成果、課題および展望を明らかにすることを目的としている。まず、「協働」に至った経緯を述べておきたい。

本研究プロジェクトを発足させる契機は2006年3月上旬の京都教育大学の水山光春教授からのメールである。水山氏の知人であり、今回の共同研究者である「シティズンシップ教育推進ネット」の大久保正弘氏が埼玉県で「ローカル・マニフェストを用いた公民教育(もしくは総合的な学習)の実践に協力できる」教師を探しており、その指導プランを中央大学公共政策研究科院生の原口和徳氏が作成しているということであった。水山氏自身は大久保氏から「少し内容をうかがって、とても意味あるプランだと思っていますが、あいにく京都から毎度出かけるということ

* 埼玉大学教育学部社会科教育講座

** 埼玉ローカル・マニフェスト推進ネットワーク

*** 桶川市立加納中学校

ができませんので、現場の先生のご紹介も含めて、先生のお知恵を拝借できないかと考えた次第です」という連絡内容であった。

その後、「シティズンシップ教育推進ネット(<http://www.citizenship.jp/>)」の大久保氏に連絡したところ、この研究の背景には以下の事情があった。つまり、全国的な組織である「ローカル・マニフェスト推進ネットワーク」の埼玉支部(<http://www.local-manifesto.jp/network/index.html>)がローカル・マニフェスト(地域版のマニフェスト)を用いた市民性の教育実践を展開する上で、埼玉支部から「シティズンシップ教育推進ネット」に協力依頼があり、両者で、マニフェストを用いた教育プログラムの開発を進めようとしているが、ローカル・マニフェストを用いた公民教育(もしくは総合的な学習)の実践に協力できる埼玉県内の教師を探しているという事情であった。ローカル・マニフェスト・公民教育に関心のある中学校社会科教師の推薦依頼が埼玉大学の社会科教育研究室の大友にあったという次第である。

そこで、2006年3月24日に大久保氏と埼玉ローカル・マニフェスト推進ネットワークの西尾真治氏と打ち合わせを行ない、実践者として桶川市立加納中学校の宮澤好春教諭に研究協力を依頼することになった。宮澤氏は平成14年度に長期研修教員として埼玉大学教育学部社会科教育学(大友秀明)研究室に派遣され、『地域に主体的にかかわり、自ら学ぶ社会科学習 - 「社会参加」学習をてがかりに』(報告書)をまとめた社会科教師である。「社会参加」を研究主題にしているため、今回の研究協力者としては適任と考えた。

このような経緯から「シティズンシップ教育推進ネット」「ローカル・マニフェスト推進ネットワーク」「桶川市立加納中学校」「埼玉大学教育学部社会科教育研究室」が「協働」で「ローカル・マニフェストを活用したシティズンシップ教育」を研究することになった。

その後、教育委員会の指導主事、大学院生等にも参加を求め「埼玉ローカル・マニフェスト/シティズンシップ教育研究会」を組織した。そのメンバーは以下のとおりである。

| 氏名 | 所属 |
|---------|-------------------------------|
| 大久保 正 弘 | シティズンシップ教育推進ネット代表 |
| 西 尾 真 治 | ローカル・マニフェスト型政策推進研究会代表 |
| 高路地 修 平 | 三菱UFJリサーチ&コンサルティング |
| 柏 瀬 裕 之 | 行田市教育委員会主幹・指導主事 |
| 宮 澤 好 春 | 桶川市立加納中学校教諭 |
| 岡 本 順 | 越谷市教育委員会主任指導主事 |
| 山 田 和 宏 | さいたま市立高砂小学校教諭・埼玉大学大学院教育学研究科1年 |
| 原 口 和 徳 | 中央大学大学院公共政策研究科2年 |
| 川 島 美 矢 | 埼玉大学大学院教育学研究科2年 |
| 小 林 孝太郎 | 埼玉大学大学院教育学研究科1年 |
| 桐 谷 正 信 | 埼玉大学教育学部助教授 |
| 大 友 秀 明 | 埼玉大学教育学部教授 |

大久保、西尾、宮澤、原口、大友の5名で事前会合を持った上で、5月から正式に研究会を組織し、以下のような日程と協議内容で研究会を開催した。

第1回 研究会(2006年5月28日):研究会の目的と背景、フィールドワーク「まち探検」後の授

業、授業へのマニフェストの活かし方、今後の研究・授業の進め方

第2回 研究会(2006年6月18日):授業の経過と市職員の講演、ローカル・マニフェストの授業、埼玉ローカル・マニフェスト推進ネットワーク結成記念フォーラム、今後の研究会の進め方

第3回 研究会(2006年7月9日):ローカル・マニフェスト授業報告、二学期の授業計画案、7月14日のフォーラムについて

第4回 研究会(2006年8月20日):二学期の授業計画案、提案資料の作成、商工関係者との意見交換、マニフェストの取扱い

第5回 研究会(2006年9月3日):二学期の授業計画案、マニフェスト授業のねらいと方法、提案資料の作成、プレゼンテーション

第6回 研究会(2006年9月23日):マニフェスト授業のねらいとワークシート

このように研究会で指導計画や授業案を検討し、また、実際に授業を観察・分析・評価を行った。その成果については、2006年7月14日の埼玉ローカル・マニフェスト推進ネットワーク結成記念フォーラム兼関東ブロック大会(会場:大宮ソニックシティ)において大久保正弘・宮澤好春両氏が「桶川市立加納中学校におけるローカル・マニフェストを活用したシティズンシップ教育」という報告を行っている。また、10月28日のシティズンシップ教育推進ネット主催の「シティズンシップ教育の可能性について考える～日英の実践事例報告から～」(会場:独立行政法人国立オリンピック記念青少年総合センター)において宮澤氏が「日本におけるシティズンシップ教育の可能性 - ローカル・マニフェストを活用したまちづくり提案」を発表している。

なお、この研究会の活動については、2006年7月23日付の毎日新聞の「マニフェストの風 - 地方からの変革4」という記事の中で、以下のように紹介されている。

埼玉県内では5月、埼玉大学の太友秀明教授(51)の指導で、教師らの研究会が発足。桶川市立加納中学では先月、マニフェストをテーマに授業も行われた。

「紙を折って下さい」「右の方を破って片方を捨てて下さい」。生徒に紙で二等辺三角形を作ってもらおう実験。おおざっぱな指示では形がバラバラだ。ところが「辺同士がくっつくよう真ん中で折って下さい」「対角線に沿って斜めに破って下さい」と細かい指示を出すと、全員が同じ二等辺三角形を完成させた。

「最初のあいまいな内容が公約。後の具体的な内容がマニフェスト」と、研究会メンバーが説明する。生徒たちは「提案は聞く人に分かりやすく、明確に伝えることが大切とよく分かった」と感想を口にする。

有権者との明確な約束を示すマニフェストの普及は、選ぶ側の責任を問う時代の到来でもある。次世代教育は、手探りで始まっている。

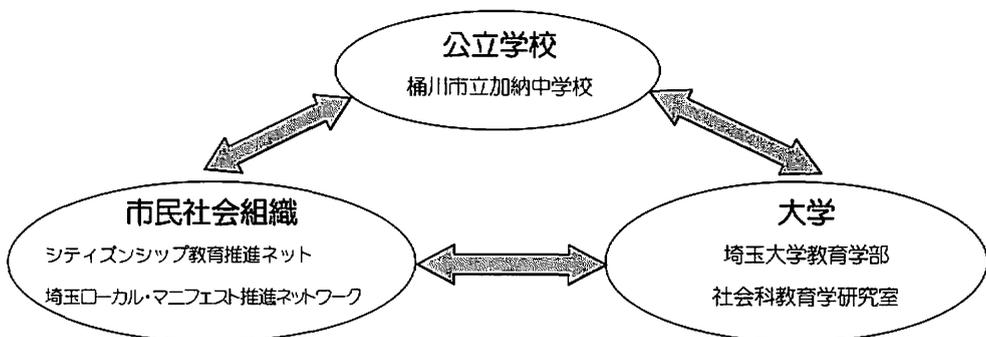
このような経緯で「協働」の試みが進められたが、授業の展開過程でさまざまな人々との「協働」の輪が広がっていった。以下、Ⅱでは協働の意義を明らかにし、Ⅲで授業の展開過程を提示し、Ⅳで協働の場面を紹介し、最後のⅤで協働の成果と今後の展望を論じたい。

(大友秀明)

II 協働のねらいと意義

本プロジェクトのキーワードは「協働」である。そして、三つの「協働」を柱に展開された。一つは、新たなシティズンシップ教育の実践を開発するために、市民社会組織（NPOや市民活動団体）と大学と公立中学校が連携した「協働」である。具体的には、市民社会組織としては、シティズンシップ教育推進ネット（NPO）と埼玉ローカル・マニフェスト推進ネットワーク（政策研究・市民活動団体）が、大学としては埼玉大学教育学部社会科教育学研究室内の教員と大学院生・学部学生が、そして公立中学校としては桶川市立加納中学校が「協働」して、「ローカル・マニフェスト」を活用したシティズンシップ教育のための新たな実践を開発したのである。この実践開発のための「協働」を図に示すと以下の図1のようになる。

図1 実践開発のための「協働」



二つ目の「協働」は、大学と公立学校の「協働」である。これは、一つ目の実践開発のための「協働」ではなく、実践を展開する上で、埼玉大学教育学部社会科教育学研究室内の大学院生と学部学生が、加納中学校生徒の「まち探検」のアドバイザーやローカル・マニフェスト型提案をまとめるためのグループワークのファシリテーターとして実践に参加する「協働」である。学び合いの「協働」でもある。中学生だけでは、「まち探検」（観察、インタビューなど）を通してまちの問題点を発見したり、発見した問題の解決策を練り上げていくことは難しい。そこに、大学院生や大学生がアドバイザーやファシリテーターとして参加することによって、中学生は、自分たちの問題意識や認識、解決策を相対化・客観化する視点を得、自身の思考を整理することができる。同時に、教員を志す教育学部の大学院生・学部学生にとっては、中学生の学習に参加することによって、大学の講義や座学では得られない、教育実践の貴重な知見と経験を得ることができるのである。

三つ目の「協働」は、開発されたシティズンシップ教育の実践を展開する上で創り出された地域社会と学校（生徒）の「協働」である。本プロジェクトで開発したシティズンシップ教育は、ローカル・マニフェストをツールとしたまちづくり学習である。生徒達が自分たちの暮らすまちの目指すべき姿、現在の到達点を明らかにし、その成果を為政者や地域住民に託し、評価すると

という一連のサイクルを参加的に学習することを通して、地方自治の担い手・まちづくりの主体としての意識を醸成し、市民としての政策形成力を育成することを目標としている。このような地方自治の担い手・まちづくりの主体を育成するシティズンシップ教育においては、生徒達は地域に出ていき、地域で暮らす人々とかかわり、地域の問題を共有し、「協働」して解決の方途を模索することが必要となる。そのような地域と学校（生徒）の「協働」によって、実質的なシティズンシップが育成されるのである。本プロジェクトにおいては、公立学校としては、桶川市立加納中学校の第3学年の選択「社会」の受講生が、地域としては、桶川市役所、桶川駅前通商店街、中山道商店街、桶川市商工会らが「協働」して、地域の問題の解決を模索したのである。

中央教育審議会・初等中等教育分科会・教育課程部会は、2006年2月の「審議経過報告」において、確かな学力を新たに、①基礎的・基本的な知識・技能を確実に「習得」させること、②こうした理解・定着を基礎として、知識・技能を実際に活用する力の育成すること、③活用する力を基礎として、実際に課題を探究する活動を行うことの三つの力で整理している¹。この生徒が地域と「協働」しながら学習していく社会参加型シティズンシップ教育で培う力は、上記の新しい学力モデルに当てはめれば、②の「活用型学力」と③の「探究型学力」である。これからのシティズンシップ教育では、実際に地域に出て、地域と「協働」して問題解決を模索する「活用型学力」と、「活用」するために地域に出て、地域と「協働」して問題を深く捉える「探究型学力」の育成が求められるのである。

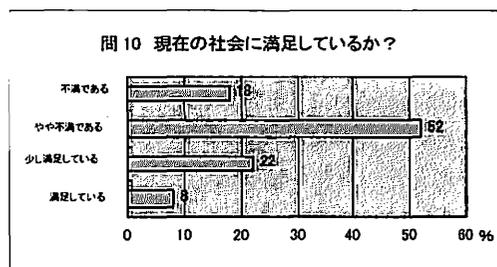
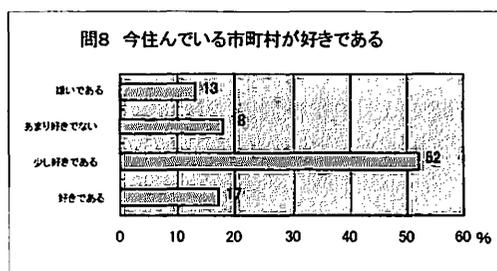
(桐谷正信)

Ⅲ シティズンシップ教育の展開 - 桶川駅東口・商店街の活性化を目指して

1. 生徒の実態

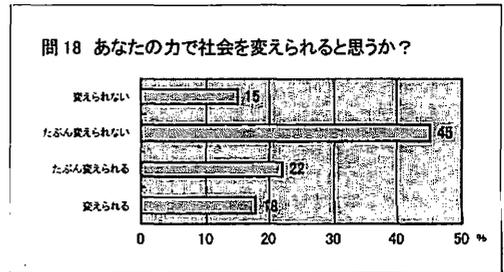
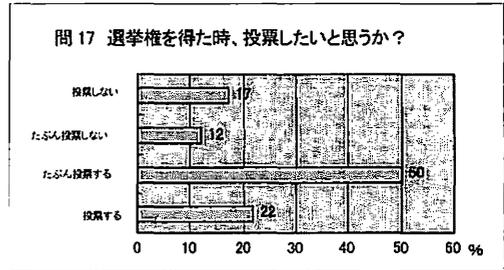
本研究をスタートする際に、「社会参加活動」や「現在の社会生活」に対する意識調査を実施した。「社会参加活動」に対する問いでは、70%の生徒が「関心がある」「少し関心がある」と答えている。「ボランティア体験」に対する問いでは、77%の生徒が「したことがある」と答えている。また、58%の生徒が「今後ボランティアをしてみたい」と答えている。これらの結果は、ボランティアを肯定的にとらえている生徒が多いと考えられる。

次に、「社会生活」に関する項目では、「今住んでいる市町村が好きか」という問いには、68%の生徒が「好き」「少し好き」と答えている。「今の社会に満足しているか」では、「やや不満があ



る「不満である」が70%を超えていた。さらに、「政治参加」に対する問いでは、「将来選挙権を得た時に投票したいと思うか」という問いに対して、「投票する」が72%であったが、全員ではなかった。そして、「将来あなたの力で社会を変えていくことができるか」という問いに対して、「たぶんできない」「できない」と答えた生徒が60%を超えていた。

本研究を進める当たり、「社会生活」や「政治参加」に関するアンケート結果、特に、現在の社会に不満がありながら、自分の力では社会を変革できないと考える生徒が多かった点や社会への不満が投票行動に結びつかない生徒が少なからずいる点に注目したい。



2. 研究の方向性

以上のような生徒の意識調査の結果から、国民の権利や政治に関する正しい理解を基に、身近な地域社会の題材を取り上げ、「社会参加」や「社会を変えていく」ために必要な手段・方法・スキルを習得させる学習活動である「シティズンシップ教育」を中学校段階で経験する必要があると考える。特に、本研究では、中学校社会科において「地域社会のひと・もの・こと」とかかわる体験的な活動を取り入れたり、「他者」とのかかわりを深めながら小グループでの作業的な活動を取り入れた学習を指導計画に位置づけたり、「シティズンシップ教育」の単元構想や学習過程、学習方法について研究を進めた。

本研究を進めるにあたり、「シティズンシップ教育推進ネット」、「埼玉ローカル・マニフェスト推進ネットワーク」、「公民教育（加納中学校と埼玉大学）」の三者が連携し、研究の方向や単元構成、学習過程、指導計画などについて協議を進めた。各団体がそれぞれの持ち味をうまく噛み合わせ、中学校における「シティズンシップ教育」の授業モデルを提案することを目指した。特に、本研究では、中学校段階で社会参加や社会を変革するために必要な手段や方法、スキル等を身につけさせることをねらいとした「社会参加学習」を提案したい。

3 授業の展開

(1) 研究のねらいと単元構想

本研究において、子どもを「小さな市民」ととらえ、「成人になった時に主体的に社会参加し、社会の改善や改革に参加・参画できる力の基礎」を「社会参加力」と定義する。そこで、中学校3年間に意図的に「社会参加力」を育成する場を位置づけ、学習を積み上げていくことによって、「公民的資質の基礎」を養うことができるとともに社会科の基礎・基本を身につけることができると考えた。単元を構想するにあたり、地域社会のひと・もの・こととのかかわりを重視し、「地域を生かす」「体験を生かす」「思いを生かす」「社会に生かす」の4つの視点から地域社会の素材を見直し、学習材とすることとした。

| | | | | |
|----------------|---|-----------------------|----------------------|---|
| 課題 追究 | ④桶川市東口・商店街のまち探検1 | 《まち探検》 【商店街】【学生】 | 問題発見 情報収集 価値判断 | ◇まち探検を行い、商店街やまちづくりのいい所と課題を見つけることができる。【関心・意欲】【技能・表現】 |
| 調査 情報 収集 | →各グループ毎に中山道商店街や桶川駅東口駅前商店街のまち探検を行い、商店街やまちづくりのいい所と課題を見つけることができる。気になった場所を写真で撮ったり、店主や客にインタビューを行い、多角的に地域を見ることができる。 | | | |
| | ※埼玉大学の学生ボランティア帯同 | | | |
| 問題 解決 | ⑤⑥まち探検のまとめ | 《ワークショップ》 【地域】【他者】 | 課題追究 思考 合意形成 | ◇まち探検で得た情報を模造紙に分類図としてまとめることができる。【技能・表現】【思考・判断】 |
| の 討論 | →まち探検で得た情報（いい所と課題）を写真やインタビューの内容等も加え、模造紙に分類図としてまとめることができる。 | | | |
| 情報 収集 | ⑦桶川市職員によるまちづくりの講義 | 《講義》 【桶川市職員】 | 情報収集 価値判断 | ◇「桶川のまちづくり」についての講義を聴くことを通して、桶川市（行政）のまちづくりの取組について理解することができる。【知識・理解】 |
| | →桶川市都市計画課の職員の方から「桶川のまちづくり」についての講演を聴くことを通して、桶川市（行政）のまちづくりの取組について理解することができる。 | | | |
| | ※桶川市都市計画課 出前講座「まちづくり」 | | | |
| 問題 解決 | ⑧⑨⑩商店街の改善策立案 | 《ランキング》 【NPO】【地域】 | 課題追究 合意形成 表現力 | ◇講義や資料を基に政策立案の手順について理解することができる。【知識・理解】 ◇商店街の課題をランキングし、上位3つ課題について改善策を話し合うことができる。【思考・判断】 |
| の 討論 | →NPOの方から講義と資料を基に政策立案の手順について理解するとともに、まち探検のまとめをはじめこれまでの学習を基に、商店街の課題をランキングし、上位3つ課題について改善策を話し合うことができる。 | | | |
| | ※ローカル・マニフェスト推進ネットワーク 講義「政策立案（ローカル・マニフェストのつくり方）」 | | | |
| 提案 行動 | ⑪改善策のプレゼンテーション（中間発表） | 《プレゼン》 【店主】【住民】 | 表現力 提案発信 自己評価 | ◇自分たちが考えた改善策を地域住民の方に発表することができる。【技能・表現】 ◇店主や地域住民の方のアドバイスを基に、改善策の練り直しを行い、マニフェスト型の提案資料を作成することができる。【技能・表現】 |
| | →改善策を商店街の方にプレゼンテーションし、改善策についての評価並びにアドバイスをもらうとともに、商店街や地域住民の方の切実な願いや思いをインタビューし、自分たちの提案に生かすことができる。 | | | |
| | ※地域社会の店主・地域住民 アドバイザー | | | |

| | | | | |
|------|--|----------------------|----------------------|---|
| 合意形成 | ⑫⑬改善策の練り直し | 《話し合い活動》 【地域】【他者】 | 意思決定 合意形成 | ◇まち探検やインタビュー、資料収集を行い、改善策の見直しに役立てることができる。【関心・意欲】【技能・表現】 |
| 情報収集 | ⑭桶川市の取組・商店街・住民等からの情報収集 | 《資料収集》 【商店街】 | 問題発見 情報収集 価値判断 | ◇まち探検のまとめやこれまでの学習を基に、商店街の改善策をまとめ、発表資料を作成することができる。【技能・表現】 |
| 合意形成 | ⑮プレゼン資料作成 | 《資料作成》 【地域】【他者】 | 意思決定 合意形成 表現力 | ◇自分たちが考えた改善策を地域住民の方に発表することができる。【技能・表現】 ◇生徒のマニフェスト型提案に対してゲストから評価・コメントをいただく。 |
| 提案行動 | ⑯地域への商店街改善策をプレゼンテーション | 《プレゼン》 【商店街】【地域】 | 表現力 提案発信 自己評価 | ◇まち探検のまとめをはじめこれまでの学習を基に、商店街の改善策をまとめ、わかりやすい発表資料を作成することができる。 |
| 振り返り | <p>※埼玉大学の学生がファシリテーターとして参加</p> <p>※市役所担当職員や地域社会の店主・地域住民がアドバイザーとして参加</p> | | | 振り返り |
| 振り返り | <p>学習後：桶川のまちづくりへ → 桶川市のまちづくりの取組への関心</p> <p>社会参加へ → 選択社会での取組を地域へ発信</p> <p>社会参加力育成へ → 情報処理力・合意形成力・提案発信力の育成</p> <p>選択社会での取組を地域へ発信(商店街のコミセンにプレゼン資料の掲示予定)</p> | | | |

4 授業のポイント

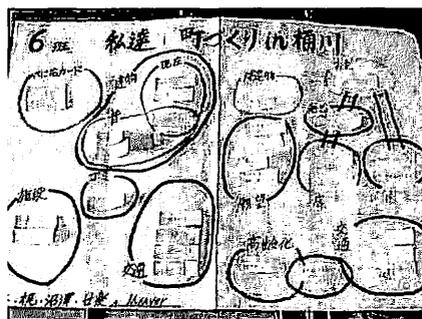
(1) まち探検

埼玉大学の学生ボランティアの協力を得て、グループ毎に桶川駅東口商店街・中山道商店街・べにばな商店街のまち探検を行った。商店街を歩きながら、まちの「お宝君」と「困った君」を探すようにした。生徒は、「お宝君」として、中山道の歴史的建造物(町屋・蔵)や専門



店の多さを挙げ、「困った君」として、歩道の狭さや店の雰囲気、駐輪スペースの狭さ、閉まっている店の多さなどをあげていた。特に、生徒は、バスと歩行者がすれ違う度に駅前通の狭さや歩道の狭さを実感したり、シャッターが閉まっている店の多さに驚いていた。

また、埼玉大学の学生の支援を受けながら、商店主からヒアリングも行った。その際、商店街の現状や集客のための努力、行政への不満など商店街の問題と直面している当事者の”生”の声を聞くことができた。



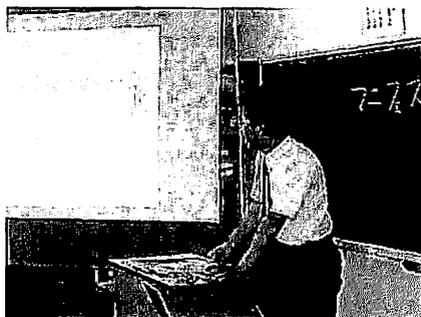
(2) 桶川市役所職員の講義「桶川のまちづくり～中心市街地の活性化の取組～」

桶川市都市計画課の職員による講義の中で、市の予算や人口の増減等が数字で示された上で、桶川市の区画整理事業や中心市街地の活性化に向けた取組などについて画像や資料を使い、丁寧に説明してくれた。市の職員からは、「中学生らしい意見が欲しい。」とのアドバイスを受けた。



(3) ローカル・マニフェスト研究会関係者の講義「マニフェストとは」

講師の先生による「マニフェストゲーム」を通して、生徒はあいまいな指示で作成した形と具体的でわかりやすい指示で作成した形の違いを実感した。マニフェストゲームの後、マニフェスト（型指示）がもつ「わかりやすさ・具体性」についての講義を受け、マニフェストについての理解を深めることができた。講義後の感想の中に「相手の立場を考えた提案をしたい」などの意見が出た。



(4) 桶川市商工会・商店街関係者との意見交換

これまでの学習のまとめとして、桶川の東口・商店街の課題を明確にした上で、「東口・商店街の改善案」を商工会・商店街の関係者に発表した。生徒からの改善策には、駅前通の拡幅や駅前ロータリーの建設、駅前通の歩行者天国化、南小学校跡地の利用、大型ショッピングセンターの建設などハード面の提案と空き店舗の活用や品揃えの多様化などソフト面の提案が見られた。生徒の提案に対して、ゲストの方からいただいた講評やアドバイ



スの中には、提案を実現させるための金銭面の問題、地権者との問題、利用者と商店の考え方のすれ違いなど具体的な問題点を指摘していただいた。一方で、中学生の柔軟な発想やこれからの桶川を担う世代からの提案に感心していただくとともに、これからの取組に期待を寄せる講評もあった。

(5) 桶川市役所・商工会・商店街関係者への提案発表

| | |
|---|---|
| <p>課題 1位) 若者向けの店がない 2位) シャッター通り 3位) 品揃えが悪い</p> <p>まちづくり 目標) 空き店舗を活用し、若者向けの店づくり 目標 数字) 客を2倍に</p> <p>まちづくり ・若者からヒアリング 提案 ・空き店舗を自分たちで再利用</p> <p>具体策 Why) 若者向けの店がない・シャッター通り When) 3年後 Where) 現在の商店街 Who) 自分達 What) 空き店舗を活用し、自分たちの店をつくる How) 若者向けの雑貨・洋服等を揃えた専門店</p> | <p>課題 1位) 道路が狭い 2位) 活気がない 3位) ロータリーがない</p> <p>まちづくり 目標) 歩道の整備・道路の拡幅→ロータリーの 目標 整備 数値) 2車線の道路・バス3台駐車可能なロータリー</p> <p>まちづくり ・駅前をロータリーにして、人を集める 提案 ・現代的な建物にする→予算の問題で</p> <p>具体策 Why) 予算不足 When) 4年後までに Where) 中山道から桶川駅までの駅前通 Who) 自分たちと商店街の人々 What) ロータリーの整備・道路の拡幅 How) 街灯で宣伝・駅前で募金</p> |
|---|---|

これまでの学習の成果として、桶川駅東口・商店街の活性化を目指したマニフェスト型のまちづくり提案を授業にかかわっていただいた桶川市役所や商工会、商店街関係者、授業にかかわっていただいた方の前で提案発表会を行った。提案内容をまとめた『まちづくり提案書』と模造紙を使用し、自分たちの考える商店街の活性化に向けて提案を行った。

発表の際に、ゲストティーチャーには、『提案評価用紙』を持っていただき、「賛同できるか・できないか」の視点で評価をしてもらった。ゲストティーチャーから生徒の提案に対して、概ね「賛同」の評価をいただいた。さらに、ゲストティーチャーからは、「どの班も商店街の現状と課題をしっかりと把握できていた」「中学生が自分の住む地域のまちづくりについて考えることは大変意義あることだ」「これからも市民の一人としてどうしていきたいか、どうなってもらいたいかを考え続けて欲しい」「様々な立場から提案が考えられていた」「マニフェスト型の提案にしたことで、自分たちにできる視点が加わった」等の講評をいただいた。提案発表を終えて、生徒からは「今回の取組を通して、桶川市のいい所と課題を見つめることができた。課題について講師の方や商店街の方、大学



生の力を借りてまちづくりの提案をまとめることができ、桶川市への理解がより深まった」「この取組を通して、色々な立場から目線を変えて見ることができた。班の皆で意見を出し合い、自分の住んでいるまちづくりについて知り、考え、参加できたことが良かった」「実際に商店街を歩いて見て、桶川駅東口と商店街の問題等がわかった。これからの桶川の活性化は、僕達がしていくものと思った」「こんなにまちづくりについて真剣に考えることができて良かったし、いい経験になった。これで終わりにしないで、市民の一人として考えていきたい」等の感想が見られた。

(6) 桶川市民へ提案発信

授業後、生徒が作成した『マニフェストを活用したまちづくり提案書』と模造紙を桶川市観光協会の中山道宿場館に展示させていただくことになった。11月の市民祭りで市民の方にも見ていただく機会をつくることができた。

最後に、商工会の方から以下のようなコメントをいただいた。「1班から13班までの提案を聞いて大変感激いたしました。短い期間で桶川の商店街の良い所悪い所を指摘し、課題を見つけて改善策を提案することは専門家でも何年もかかることです。実際に桶川市商工会では専門家による改善策を検討していただきましたが、その専門家の提案と同じような提案をしてくれた班もあり、とても驚きました。皆さんが提案してくれた内容は決して夢のような提案ではないので、どんな形になるかわかりませんが実現すると思っています。……ですので、ぜひ桶川駅東口の開発に関心を寄せていただき、中学を卒業しても見守っててください。」

5 実践の成果と課題

(1) 実践の成果

社会科の授業を通して、今どのような行動を取ることが正しいのかを判断させながら、社会の一員としての適応を考えさせるとともに、よりよい社会づくりに向けた中学生にもできる社会参加や社会貢献の在り方を模索することも必要であろう。これこそが、シティズンシップ教育のねらいであると考えられる。

シティズンシップ教育の可能性を探るため、地域社会のひと・もの・ことや他者とのかかわりを重視し、社会参加学習を構想し、実践してきた。その成果をいくつか挙げてみたい。一つ目に、地域社会のひと・もの・ことと直接的にかかわる場面を単元に位置づけたことにより、生徒の地域社会を見る視点や地域社会に対する考えを広げることができた。まち探検を行ったことで、普段気がつかなかった視点で地域社会を見直すことができたり、自分たちの改善策（提案）を地域社会のひとに聞いてもらい、一緒に考える機会をつくれたことで、自分たちの提案に足りないことや視点を示唆してくれ、市民や当事者側のニーズに気づくことができた。二つ目に、生徒が構想した提案資料を地域社会に発信できたことで、生徒が地域社会とかかわりを持つことができ、地域社会へ貢献できたという自己効力感や達成感を味わわせることができた。さらに、社会の一員としての自覚や地域社会に積極的にかかわっていかうとする意欲を高めることができ、いわゆる市民性を育成することができた。三つ目に、提案資料をマニフェスト型にしたことで、地域社会の課題を明確にし、数値目標を挙げながらその課題に対する目標と改善策をよりわかりやすく

具体的に練り上げることができた。そして、改善策として提案する中で、提案しっぱなしではなく、自分たちにできる視点を盛り込むことができた。

(2) 今後の課題

今後の課題として、シティズンシップ教育の可能性について、学習指導要領との関係を明確にし、指導計画に位置づけられるようさらに研究と実践を積み上げていきたいと考える。さらに、マニフェスト型の提案が市民性の育成に結びついているかについて授業分析を行い、検証をしていきたいと考える。特に、社会科の授業の中で身につけた知識やスキル等を実際の生活の中でどう生かしていくか、それらを生かすにはどのような場面を設定すればいいか、等についても検討を加えていく必要がある。

本実践では、地域社会のひと・もの・こととかかわる場面を学習過程に組んでいく際に、教師自身が関係機関にアポイントを取ったり、関係機関の方にゲストティーチャーとして授業にかかわってもらうことができた。その際に、《シティズンシップ教育推進ネットワーク》や《ローカル・マニフェスト推進ネットワーク》のようなNPOが連携を図る時のコーディネーター役としてかかわってもらうことができれば、普段の授業の時から地域社会のひと・もの・こととかかわりを持たせながら授業を進めることができると考える。

(宮澤好春)

IV 協働の場面

1. フィールドワーク「まち探検」

平成18年5月24日、フィールドワーク「まち探検」が行われた。あいにくこの日は土砂降りという悪天候で、生徒たちは傘をさしながら、中山道商店街・桶川駅東口駅前商店街を探検することとなった。

「まち探検」の目的は、事前にグループごとに決めた調査のポイント（交通、福祉など）にしたがって、まちの「お宝くん」（よいところ）と「困ったくん」（問題点）を探したり、まちの人にインタビューをしたりして、情報を収集し多角的に地域を見ることである。

探検の方法として生徒たちは、商店街を歩きながら、渡された付箋紙に気づいたことを書き込み、その場所に該当する地図上の地点に貼っていくように指示された。

「まち探検」を開始してからの生徒たちは、やはり激しい雨のせいか、全体的に活動に対する意欲が低いようにみえた。また、調査のポイントが決まっていないグループもあり、どうしたらよいかわからないという様子の生徒もいたようだった。

しかし逆に、その悪天候のおかげか、歩道の歩きにくさ、水はけの悪さ、道路の狭さ、に関してはほぼ全員の生徒が問題点として強く認識していた。

商店街を歩き続けていくうちに、生徒たちは多くの「困ったくん」を見つけ出せるようになった。歩道に関する次の次に生徒たちの多くが目をつけたのは、シャッターが閉まっている店が多いことだった。探検の開始が午後5時からということもあり、「飲食店はこれからがかけ入れ時なのになぜ閉めてしまうのか」というような疑問をもつ生徒もいた。

どの生徒も「困ったくん」は比較的すぐ見つかるが、「お宝くん」は見つけるのが難しいようだった。各グループにサポートとして入った大学生の何人かは、桶川が宿場町であったことに目を向けさせようとし、生徒たちにそれぞれ質問をしていた。そのせいか、「お宝くん」として、「古い店（伝統的な建物）がある」ということに注目したグループが多かった。

探検中ほとんどのグループが、店の店員、駅の利用者などにインタビューを行うことができた。インタビューの質問事項はしっかり決まっていなかったところが多かったようだが、積極的に質問し、記録していたようだった。またその際、「雨で濡れたまま店内に入らないようにしましょう」とか、「忙しそうだからインタビューを控えよう」などといったように、マナーを守ろうとする意識を持った生徒もいた。

探検も終了の時刻が近づいてくると、開始の頃と比べて活動への意欲も上昇していたようで、帰り道に疑問や問題点などについて話し合う生徒の姿をちらほら見ることができた。

「まち探検」によって生徒たちが発見した「お宝くん」「困ったくん」には、主に以下のものがあげられる。多い意見から順にあげていく。

「お宝くん」：古い店（伝統的な建物）がある／タクシーが多い／道にごみが落ちていない／駐輪場が多い／商店街が駅に近い／高い建物がない／ベに花カードが活用されている／桶川宿の資料館ができた／バスの発着本数が多い／店が密集している

「困ったくん」：歩道・道路が狭い／水はけが悪い／閉まっている店が多い／駐車場がない／店の雰囲気や暗い／品数が少ない／店員の対応が悪い／人通りが少ない／若者向けの店がない／バリアフリーに対処していない／街灯が少ない／交差点の見通しが悪い／店と店の間隔が狭い／大型店がない／木や看板が歩道にせり出している

全体的に「まち探検」の活動をふりかえると、やはり天候の悪さが活動内容に大きな影響を与えていたと感じる。生徒たちは付箋紙を渡されていたのだが、片手に傘を持った状態でメモをとることは困難だった。そのためか、雨宿りできるように、各店に屋根がないことを指摘する生徒もいたし、「アーケードがあったらいいな」と考えた生徒もいた。天候の悪い日でも客足の遠のかない商店街になるためにはどうしたらいいか、という視点で課題を考えられたことは、雨降りの中での活動が功を奏した部分だろう。

また生徒たちは、道路や店の外装など、ハード面に対しては数多くの問題点に気づくことができていたが、ソフト面に対する気づきはあまりなかった。ハード面の問題点はわかりやすいため、商店街を歩くだけでも気づくだろう。しかしソフト面の問題点は、「店員の対応」のように、人とかかわりの中から気づくことが多いと思われる。

この実践の最終的な活動に、生徒たちによるまちづくり案のプレゼンテーションが行われたが、その案はハード面での問題解決に関わるものが多くあげられた。「道路を整備する」や「店をつくる」という案に対して「自分たちができること」として発表されたのは、「募金活動」がほとんどであった。「まち探検」の際に、ソフト面への気づきが多くあったなら、もっと多様な案が出されたかもしれない。ソフト面へどう生徒たちの気づきの目を向けるかが課題であると感じた。

課題はあるものの、この「まち探検」で、生徒たちはとても多くの発見をしていた。まちの人

にふれ、あらためて自分たちのまちを見直すことで、まちの住民としての意識が高まったようであった。

(川島美矢)

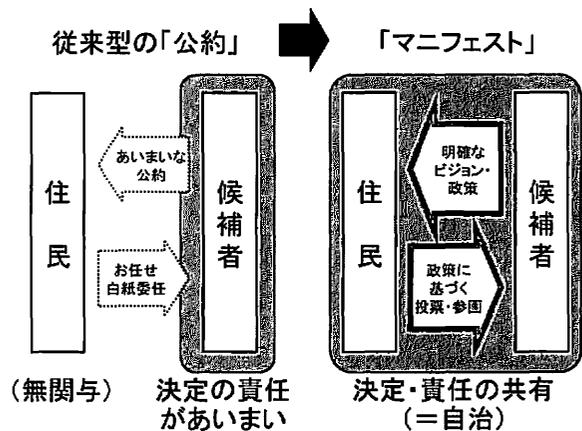
2. マニフェストのワークショップ

(1) ねらい

① マニフェストの意義

「マニフェスト」とは、もともとは政党が掲げる政権公約のことを指すが、わが国では一般的に、「数値目標や期限、財源、工程などを具体的に示した事後検証可能な公約（政策集）」と定義される。従来型のあいまいな公約と異なり、選挙時に具体的な政策が示されることにより、有権者は政策によって投票を判断することができるようになる。また、約束した政策の実施状況・達成状況を、有権者が後からチェックすることができるようになる。いわば、候補者と有権者が政策についての「契約」を交わすことになり、双方の責任と緊張が高まる。

有権者にとっては、政治家に政治を白紙委任するのではなく、自ら政策を判断し、決定することが求められる。それにより、市民における政治の当事者としての役割・責任が高まることになる。特に身近な地方政治においては、住民自治の可能性が高まる一方で、市民におけるシティズンシップがより一層問われるようになる。



② マニフェストとシティズンシップ教育

このようなマニフェストの導入・活用による地方政治・地方自治の活性化を、市民側から推進しようとする市民団体が、「ローカル・マニフェスト推進ネットワーク」である。

本ネットワークでは、市民がマニフェストを使いこなし、地方政治の「主役」としての役割を担っていきえるようにするためのシティズンシップ教育を事業の柱の一つとしている。また、マニフェストの概念を利用して、市民サイドからの政策提案につなげようとする活動がある。要望を「あれもこれも」盛り込んだ無責任な「ウィッシュ・リスト（おねだり集）」ではなく、「あれかこれか」に絞り込み、場合によっては苦い薬も入れた「市民マニフェスト」として市民ニーズを政策化しまとめることで、実現可能性があり具体的で責任ある政策提案に結びつけようというものである。こうしたノウハウを授業に生かすことで、中学校におけるシティズンシップ教育の効果をより高められる可能性があるのではないかと考えた。

③授業におけるマニフェストの活用

授業にマニフェストを活用する方向性については、あくまでも生徒が自分たちで見聞きし考えたことをまちづくりの提案としてとりまとめていくことをベースとして、そのとりまとめの方法についてヒントを提示することを基本とした。マニフェストそのものについて解説するのではなく、マニフェストの本質的な要素が生徒に伝わるように工夫をした。

具体的には、授業を2回に分けて、まず前期のまちづくりの提案を作成する初期の段階で、「わかりやすさ」「具体性」「実現可能性」という視点の重要性について認識できる内容を検討した。次に、後期の最終的に提案をとりまとめる段階で、マニフェストを構成する項目に即してこれまでの検討事項を整理できるような内容を検討した。さらに、実現可能な提案を検討するなかで、中学生としての自分たちが取り組めること、という「当事者性」にも留意できるような工夫をした。

なお、2回の授業は、いずれも生徒参加型のワークショップ形式とし、特に1回目の授業には「スノーブレイク」と呼ばれるゲームの要素を取り入れることにより、「マニフェスト」という耳慣れない言葉による壁・抵抗感を取り除き、生徒が取り組みやすくなるように留意した。

(2) 展開

①1回目の授業 (マニフェスト・ゲーム)

「スノーブレイク」と呼ばれるゲームを活用して、聞く人の立場で、具体的でわかりやすい提案をとりまとめる必要性についての視点を獲得できるようにすることを目標とした。

なお、教材については、パワーポイントを活用し、ポンチ絵を使いながら、生徒の興味を引き出すように工夫している。

まず、生徒全員にA4の白紙を配布し、講師から口頭で5つの指示を出し、各々その指示に従って紙を折ったり破ったりする。その結果、できあがった紙片を周りの生徒と比較し、それぞれバラバラの形の紙片になっていることを確認する。そこで、講師から見本の紙片(二等辺三角形)を示し、本当は全員に見本の形と同じ形にしてもらいたかったのに、なぜバラバラになってしまったか、という問いかけをする。



○指示内容の確認

- ① 折って下さい
- ② 右の方を破って下さい
- ③ 片方だけ残して下さい
- ④ 斜めに破って下さい
- ⑤ 広げて下さい



○指示内容<修正例>

- ①(長方形の長い辺がぴったりくっつくように真ん中で)折って下さい
- ②(折ったまま、長い辺の右から5cmのところからまっすぐ)右の方を破って下さい
- ③(大きな方を)片方だけ残して下さい
- ④(対角線に沿って)斜めに破って下さい
- ⑤広げて下さい



次に、スライドに先ほど行った5つの指示の内容を投影し、文字で内容を確認する。その指示をどのように修正すれば、全員が見本と同じ紙片を作ることができるか議論し、指示の文面を修正する。その上で、もう一度白紙を配布し、修正した内容で同様の指示を行うと、今度は全員が見本どおりの紙片になったことを確認する。

そこで、ゲームのとりまとめとして、1回目に指示がうまく伝わらなかったのは、指示が「あいまい型」で、自分の思いだけが前面に出て、明確な指示になっていなかったためと分析した。一方、2回目に指示がうまく伝わったのは、「聞く人にとって」「具体的で」「わかりやすい」指示であったためと分析し、この3つの要素を満たすものを「マニフェスト型」と呼ぶこととした。

こうした体験学習を踏まえて、これからまちづくりの提案をまとめていくにあたり、「聞く人にとって」「具体的で」「わかりやすい」提案にしていくことの必要性を確認した。

ゲームを通じて、生徒の積極的な参加がみられ、マニフェストの要素をわかりやすく理解することにつながった。特に、生徒が自分で折ったり破ったりしてできた紙片の形が全員揃ったことを確認することで、視覚的なイメージとしてマニフェストの概念が理解された。また、提案する自分たちの立場だけではなく、提案を受ける相手側の立場を考える視点について気づききっかけにもなった。

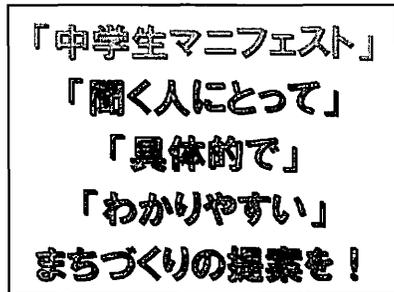
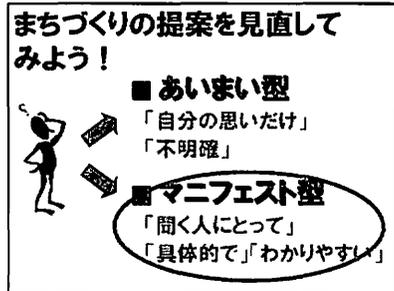
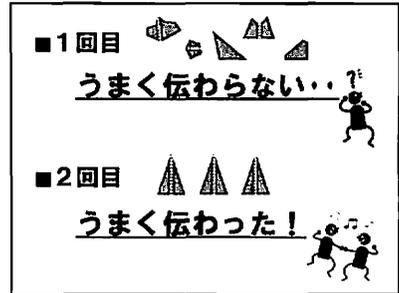
② 2回目の授業（マニフェスト型まちづくり提案とりまとめワークショップ）

後期の終盤になり、各グループのまちづくり提案がまとまってきた段階で、課題・現状認識からまちづくりの目標設定、具体策の提案に至る一連の流れを再整理するとともに、より具体的で実現可能性があり、場合によっては自分たちが実践できることについても検討するワークショップを開催した。

市民マニフェスト作成に活用する政策立案ワークシートを活用し、グループごとにワークシートに沿って議論しながら提案内容のとりまとめを行った。

なお、各グループには埼玉大学の学生がコーディネータとして入り、議論をリードした。

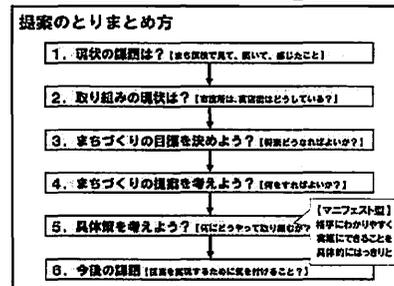
まず、現状の課題について、まち探検で見たこと、聞いて



平成18年9月29日(金)
埼玉県ローカル・マニフェスト/
シティズンシップ教育研究会

マニフェスト型!
「桶川の東口・商店街の
活性化を目指して」
提案とりまとめシート

| | |
|-------|-------|
| グループ名 | (班) |
| メンバー名 | |



たこと、感じたことをもとに付箋に書き出し、大きくハード系とソフト系に大別しておく。これは、ハード系とソフト系では、課題解決に必要となる施策の性質・コスト等が大きく異なってくることについての視点を付与することをねらいとしている。

それらの課題の重要度・優先度について議論し、第1位から第8位までの順位を決める。順位を決める上で、議論が分かれたものについては、論点を書き出しておくこととした。

次に、重要課題を取り上げて、その課題に対して現状で取り組みがなされているものを確認する。市役所側の取り組みと、商店街側の取り組みの、双方をチェックする。

これらの「課題」と「取り組み」を比較し、両者がかみ合っていないところ、ギャップがどこにあるのかを議論する。それを踏まえて、将来どんな商店街になるとよいか、まちづくりの目標を設定する。目標については、できるだけ具体的な数値に置き換えられないか、を検討する。これは、客観的な数値で考えてみることで、抽象的な将来像を具体化し、メンバー間で共有できるようにするとともに、現状がどのレベルにあるのかを具体的に再確認し、実現可能な目標水準を検討できるようにすることをねらいとしている。

次に、課題と取り組みの溝を埋め、目標を達成するために何をすればよいか、具体策をリストアップする。この中で特に、市民がやるべきこと、中学生の自分たちがができること、についても議論する。

最後に、それらの具体策のうち一つを取り上げ、5W1Hに沿ってマニフェスト型に詳細化する。「Why（なぜ・目的）」として、目標をできるだけ数値目標として再確認する。「When（いつまでに）」として、期限を設定する。「Who（誰が）」として、実施主体を確認する。この中で、「中学生（自分たち）が」という視点を入れることも検討する。「What（何を）」として、政策の対象物・対象者を明確にする。最後に「How（どうする）」として、時間軸に沿って作業手順・工程を整理する。また、予算がいくらくらいかかき、その財源をいかに調達するか、についても検討する。

こうした一連の議論・作業を通じて、これまで実施してきた多面的な作業を再整理するとともに、課題抽出・現状認識からまちづくり提案に至る検討プロセス・思考の流れを理解することに役立った。また、課題に優先順位をつけ、その課題解決に効果があると考えられる具体策を絞り込む検討によって、政策の有効性・効率性・経済性について考える視点が加わった。さらに、5W1Hに沿って提案内容を詳細化する作業によって、課題・問題を生じさせている背景・本質的な要因により迫ることができた。これらを通じて、生徒たちが、単なる机上の議論を行っている

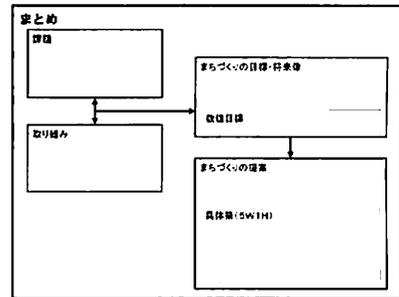
5. 具体策を考えよう？【何にどうやって取り組むか？】

(具体策)

※「5W1H」を考えてみよう！

| | | |
|-----------------|--|-------|
| Why (なぜ・目的) | | ※数値目標 |
| When (いつまでに) | | |
| Where (どこで) | | |
| Who (誰が) | | |

| | |
|---------------|--------|
| What (何を) | |
| How (どうする) | |
| | ※予算・財源 |



のではなく、実際に自分たちのまちをよくする取り組みを行っているという実感につながった。中学生の自分たちができることについての提案がなされたり、「これで終わりにしないで市民の一人として今後も考えていきたい」といった感想が聞かれたりしたことに、「主体的市民」を育成するシティズンシップ教育の手法としての可能性を感じている。

(西尾真治)

3. マニフェスト型提案資料の作成

(1) 「マニフェスト型」提案の意義

マニフェストについてのワークショップを行った後、生徒は自分たちの商店街活性化案をまとめ、「マニフェスト型」の提案資料を作成した。具体的な項目は、1.改善すべき課題、2.これまでの取組(行政・商店街) 3.まちづくりの目標(数値目標を含む) 4.提案 5.具体策とした。

「マニフェスト型」提案を作成することの意義は、提案内容に具体性をもたせることにある。具体性をもたせることで、提案を聞き手にとって分かり易いものにできるだけでなく、表現する主体(学習者・生徒)の思考を深めることができる。

「〇〇なまちにしたい。」「□□を変えたほうがよい。」といった、スローガンや改善すべき点だけを述べる場合、生徒の思考はそれ以上深まりにくい。しかし、課題やこれまでの取り組み、数値目標や期限といった具体的な項目を提案に取り入れることで、生徒はそれまでの学習を整理する必要が出てくる。また、作成の過程で「課題の優先順位」や「目標と従来の取り組みとのずれ」、「手立てと実現可能性」など、既習事項を関連付けて思考することが求められる。つまり、マニフェスト型の提案を作成する過程で、生徒が自分の学びを分析・総合し、知識を相互に関連付け、意味あるものとして獲得できると考えられる。

(2) 学習の実際

実際の学習では、大学生がファシリテータとして参加したワークショップで「マニフェスト型」の提案を作成し、その後、生徒が修正・練り上げを行った。

A班では、提案作成前までは「道路整備」を重要な課題としていたが、課題に優先順位をつける活動を通し、「店の雰囲気改善」を最重要課題とした。話し合いで、「店の雰囲気」は内装・外装・照明といった設備面と接客態度や店員の年齢層といった人的側面から構成されていることに気付き、結果として設備面を改善するための提案を作成することとなった。「店の雰囲気」という漠然した問題を多面的にとらえ直し、より明確な課題としてつかむことができたと考えられる。

B班は、まちづくりの目標を具体化していく中で、道路拡幅の計画はあるが実現していない、という事実に注目した。課題の解決には予算だけでなく、既に住んでいる人々の合意や協力も必要なることに気付くことができた。最終的な提案においても、残された検討課題の一つとして「市民が納得するかどうか」を挙げている。目標と事実を比較し、住民の立場も含めて総合的に考え、住民の合意形成がまちづくりのより根本的な問題として存在することに気付くことができた、と考えられる。

C班は、「幅広い年齢層の人々が集まる商店街」を目標に、具体策を検討した。「空き店舗の有効活用」を提案の骨子としたが、予算、ねらいとする客層と店種、人材の確保など、克服すべき課題が具体的に浮かび上がってくるとともに、解決策としての提案内容も具体化していった。「高齢者の方々に出店していただく。」「定職につかない若者に呼びかける。」など、現代の社会問題を

反映していると見られる発言もあった。「自分達で出店する。」「ポスターを作って呼びかける。」など、主体的にかかわろうとする提案も、「マニフェスト型」提案の作成という、“具体化する過程”を経た結果と考えられる。

(3) 成果と課題

提案を「マニフェスト型」にしたことの成果として、主に次の3点が挙げられる。

- ・提案を具体化する（なぜ・どこで・だれが・何を・どうする）過程で、既習事項を分析し、関連付けて考えることができた。
- ・数値目標や期限など、実現可能性を考慮することで、生徒は関連する諸問題にまで自然に視野を広げることができた。
- ・単に「商店街の問題」ではなく、背景にある「行政の働き」や「住民の合意形成」などの問題について考えることができるようになった。

また、具体的でありながらも簡潔に表現できたこと、話し合いの視点が明確になったことなども成果として挙げられる。

課題として、主に次の2点が挙げられる。

一つ目は、既習事項をより効果的に活用できるようにするための工夫である。生徒は、それまでの学習を振り返りながら提案を作成することとなる。ノートやプリントで学習の経過を記録しておく、掲示物で学習内容を整理しておくなどの工夫が必要である。二つ目は、提案項目の工夫である。今回の活動では、数値目標や期限も提案項目としたが、提案内容によっては設定しづらい場合もある。また、予算については、既習事項だけでは具体化できないこともあり、形骸化する傾向も見られた。今後検討が必要と思われる。

今回、「マニフェスト」そのものではなく、「マニフェスト型」の提案としたことで“方法・過程”としての位置付けが明確になり、市民性・シティズンシップの育成につながる成果が得られたと考える。

(山田和宏)

4 まちづくり案のプレゼンテーション

本実践のまとめとして、班ごとに立てた課題を解決するための、マニフェスト型のまちづくり提案をプレゼンテーションした。このプレゼンテーションには、ゲストティーチャーとして桶川市役所都市計画課の方、桶川市商工会・商店街にかかわる方々、マニフェスト講義を行った西尾氏の計7名が参加した。また、埼玉ローカル・マニフェスト/シティズンシップ教育研究会のメンバーや、まち探検やマニフェスト講義などで協力した埼玉大学教育学部社会科教育学のゼミ生が授業の様子を見学することとなり、大勢のゲストとの協働が図られるかたちで行われた。

プレゼンテーションは各班（計13班）4分ずつ行った。予め、各班のマニフェスト型提案の内容をまとめた資料が冊子となって配布され、教室の壁には各班の提案内容に即した模造紙が掲示してあった。それらをもとに発表を進めていったため、4分という限られた時間の中でも、提案内容を端的に伝えることができていた。

提案内容は、桶川駅東口商店街の課題とこれまでの取り組み、まちづくりの目標、まちづくりの提案、具体策、検討課題、取り組みの感想という順序で行われた。まず、桶川駅東口商店街の

まち探検を通じて感じ取った課題を、第1位から第3位まで理由をつけて挙げた。また、これまでの桶川市や商店街の取り組みについて、調べたり聞きとったりしたことを発表した。この現状把握をもとにして、班ごとのまちづくりの目標、提案、具体策についての提案がなされた。目標は、道路の整備をすすめるといったハード面と活気ある商店街をつくるといったソフト面を目指すものとの大きく2つに分かれていた。そこから、マニフェスト型の手法を用いて、具体的な数値目標や絵地図などを利用したまちのイメージを提示することによって、目標に対するさまざまなアプローチが班ごとに考えられ、各班の独自性がみられる多様なまちづくりの提案が展開されていた。マニフェスト講義がもっとも活かされていた提案は具体策である。具体策は、いわゆる5W1Hに沿ったかたちになっており、方策とその方策がなぜ必要か、いつまでに、どこで、それが、何を、財源まで含めてどうするのかといった細部にまで具体的な提案をしていた。また、この具体策は自分達にできることも明記することとなっていて、他人任せではなく、実現を目指すために中学生なりにできることまで考えてられていた。最後に、検討課題や取り組みの感想を述べ、中学生の視点からのまちづくり提案をゲストティーチャーに提案していた。

班の発表が終わるごとに、評価シートを使ってそれぞれの生徒が発表に対する評価も行った。その評価は、班ごとの提案に対して現状の把握ができているか、提案の具体性や独自性、実現可能性があるかなど、マニフェスト型提案であるということ踏まえた観点からなされた。そして、その提案に賛同できるか否かを評価したり、提案への意見などを書き込んだりした。また、この評価シートは、生徒のみならずゲストティーチャーや学生にも配布され、さまざまな聞き手からの評価が集めることができたことで、フィードバックの資料としても充実した。

全ての発表が終わると、ゲストティーチャーからのコメントがあった。その中で、どの班も商店街の現状や課題をしっかりと把握できていて、その上で自分たちの夢を描きながら桶川のまちについて考えていたという講評があった。また、桶川は宿場町として栄えていたという歴史があり、歴史的な建物も残っているのだが、そのような古いものを必ずしも残さなければいけないわけではないのかもしれないといったような、大人の間での話し合いではなかなか出てこない視点があったことも評価していた。さらに、桶川のまちは日々変化を遂げるため、その動向を見据えながら今後も自由な発想でまちのことを考え続けてもらいたいという要望も出た。

ゲストティーチャーに商店街の現状や課題をしっかりと把握できていると評されたことは、生徒がフィールドワークやさまざまな資料を活用し、班ごとに整理したうえで提案できたということを示している。そして、生徒もゲストティーチャーも、桶川に住む市民の一員として、まちの問題意識を互いに共有できたといえる。この問題意識の共有が、世代を越えて桶川のまちをよりよいものにしていきたいという意識の喚起につながったと思われる。また、既存の知識や新たな経験を活用、探求していったことで、実際の地域における問題解決のプロセスや地域への働きかけ方を、生徒は学習することができた。さらに、これまでの学習活動から生まれた提案に対する反応を、講評や評価シートを通じて素早く受け取ることができたため、生徒は提案を受け止めてもらえたことに対して、一定の効力感を得ることができたと思う。このようなことから、ゲストティーチャーをはじめ、公立学校の枠を越えた人々と協働したプレゼンテーションは、意義があったといえる。

(小林孝太郎)

V 協働の成果と展望

1. 宮澤実践の意義と協働

今回の宮澤実践の展開過程を整理すると、次のようになる。

- 第1次：市政の現状と課題〈3時間〉
- 第2次：まち探検とまとめ〈5時間〉
- 第3次：まちづくり案の作成〈3時間〉
- 第4次：まちづくり案の発表と意見交換・交流〈2時間〉
- 第5次：マニフェスト型の提案資料作成とプレゼンテーション〈4時間〉

宮澤実践の特色を挙げるとすれば、次の3点にまとめることができよう。

第一に、子どもたちが身近な地域の公共問題に取り組んだことである。具体的には、桶川駅東口や中仙道の商店街の活性化、まちづくり、駅東口の開発問題などである。

第二に、学習の過程で様々な人々・他者とのかかわりができたことである。まち探検では、商店主へのインタビュー、大学生からのアドバイスがあり、市の都市計画については、市職員からのお話があり、マニフェスト型の提案資料の作成については、ローカル・マニフェスト型政策推進研究会会員によるワークショップや大学生からの支援を受けている。最後の意見交換やプレゼンテーションでは、級友・仲間、市職員、商工会役員との意見交換・交流の場面が設定されていた。

第三に、提案資料のマニフェスト化である。数値目標（期限、財源など）、ねらいと効果、行政・商店街・子どもなどそれぞれの立場の明確化、ハード面とソフト面の区別、自分たちにできることなどを意識して提案資料が作成されていた。

このような特色が生まれたのは、シティズンシップ教育推進ネット（NPO）、埼玉ローカル・マニフェスト推進ネットワーク（政策研究・市民活動団体）、埼玉大学教育学部（公民教育）、桶川市加納中学校が連携・協働し、各組織・団体の持ち味をうまく組み合わせることによる。「シティズンシップ教育」、「公民教育」、「ローカル・マニフェスト」の3つの視点から、教材、指導計画、授業等の検討を重ね、各組織・団体が協働することを通して、シティズンシップ教育を活性化させようとしたのである。

今回の「協働」では、それぞれの組織・団体の教育資源を共有化させることによって、それぞれにとって有益な活動が可能になった。シティズンシップ教育推進ネット（NPO）は、市民・成人教育のプログラムだけではなく、成人前の学校教育にかかわることができ、埼玉ローカル・マニフェスト推進ネットワーク（政策研究・市民活動団体）は政治教育の場にかかわり、埼玉大学教育学部（公民教育）は実践の場に教員志望の学生を参加させることができ、桶川市加納中学校は子どもが市民性・シティズンシップ教育を受ける機会を得ることができたことになる。

しかし、実践を積み重ねるにしたがって、地域とのかかわりが深くなっていった。商工会の方々

との意見を交流させ、商工会の方々や市職員から生徒のプレゼンに対する意見・感想を頂き、桶川市観光協会の中山道宿場館に生徒の提案作品が掲示・展示されるなど、地域との「協働」の萌芽を見ることができる。

2. 協働と学校教育の改革

「協働」の先にあるのはコミュニティづくりであり、そこを拠点としたシティズンシップ教育である。

学校と地域の関係を問い直し、市民性教育・シティズンシップ教育を実現するために「教育コミュニティ」を提唱したのが池田寛氏である。氏は「教育コミュニティ」について、次のように述べている²。

『教育コミュニティ』とは、学校と地域が協働して子どもの発達と教育のことを考え、具体的な活動を展開していく仕組みや運動のことを指している。

教育コミュニティづくりを進めていくのは、教師、地域住民、保護者、そして行政関係者やNPOの人びとである。これらの人びとが、『ともに頭を寄せ合い子どもたちのことを考え、いっしょに汗を流しながらさまざまな活動に取り組むこと』が教育コミュニティづくりのかたちであり、『ともに集う場』『共通の課題』『力を合わせて取り組む活動』がその基本的要素である。」

このように、池田氏は学校で展開されている多様な活動を機縁として、地域の中に新たな人間関係のネットワークを形成することによって、「子育ての共同性」を回復しようと図っている。

その際のキーワードが「協働」(コラボレーション)という言葉である。「協働」においては「共同作業によって新しい人間関係や教育的活動をつくっていくことを通して、お互いに変わっていく」という側面が重視されるという。「協働」では家庭・学校・地域の相互依存性・相互関連性が強調されているのである³。その場合、学校教育の役割、課題は何であろうか。池田氏は、学校教育の目的として、①一人ひとりの子どもの能力の開発と自己実現、②社会の発展に寄与する人材の開発、③生活人としての資質や市民的責任の遂行といった課題への対応の3つを挙げている。この3つの目的を同時に追求しなければならないが、近年の教育議論では①②の目的に焦点が当てられ、③が軽視されていると指摘している。何が大切なのだろうか。

「世界の教育改革のなかでは、……多様な文化をもった人びととともに生きていくために必要な資質や責任や問題解決能力を育成するために、『市民性』教育を学校教育の重要な課題として位置づけたり、他者やコミュニティへの貢献体験が青少年の成長・発達に起きて不可欠であるとの認識から、サービス・ラーニングをカリキュラム化する流れもあるのである。……さまざまな体験や活動、そしてコミュニティへの参加をきっかけにして、生活の中での学びを呼び起こすこと、すなわち、生活への気づき、他者への気づき、社会への気づき、環境への気づきなどを通じて、子どもがみずから大切にしたいものを見いだし、それを育んでいけるような学びを創造することが、いま求められているのである。」⁴

このように、学校教育の実践的な課題として「市民性教育」「シティズンシップ教育」を提起し、そのために、「協働」を核とした「教育コミュニティ」づくりを提唱した池田氏の教育論は傾聴に値する。「協働」の先には壮大な教育改革、学校改革がある。今回の試みはその端緒に過

ぎない。

(大友秀明)

<註>

1. 中央教育審議会・初等中等教育分科会・教育課程部会『審議経過報告』(2006年2月13日)。社会参加学習の必要性を提起する唐木清志は、全国社会科教育学会第五回全国研究大会課題研究発表において、「活用」の重視の観点から、この「習得」「活用」「探究」型学力の捉え方の必要性を指摘している。
2. 池田寛『人権教育の未来』解放出版社、2005年、11-12頁。
3. 志水宏吉『学力を育てる』岩波書店、2005年、191-193頁。
4. 池田、前掲書、135頁。